

美濃陶磁歴史館だより



連続

うちんたあのお宝、なんやね？

コラム

第11回 小山富士夫の「花の木窯」(泉町)

「美濃はなぜ「六古窯」に入らなかった？」

陶磁研究の世界的権威である小山富士夫(1900・75)が、市内五斗時の地に窯を開き、晩年を過ごしたことをご存知でしょうか？

昭和46(1971)年、二宮市長が「美濃陶芸村」構想を立ち上げ、第1号入村者として小山に声を掛けたことが移住のきっかけです。陶芸家塚本快示らが候補地を案内したところ、小山は、そこに立つ濃紅色の花をつけた「ハナノキ」に目を奪われ、「花の木窯」の開窯を即断します。すぐさま陶房と邸宅を建設、斜面に「蛇窯」という縦に長い新窯を築きます。昭和48年5月に窯開きが行われますが、小山は昭和50年10月に花の木窯において急逝しました。

「六古窯」は中世から現代まで生産が続く窯として、瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波、備前を指して小山が付けた名称です。小山は戦前から構想を持ち、当初は越前を除いた「五古窯」、昭和23(1948)年5月の越前古窯調査により、越前を加えた「六古窯」が誕生しますが、残念ながら美濃は含まれません。

実は、越前古窯を発掘した昭和23年5月から半年後の秋、小山は荒川豊蔵とともに中津川の窯跡調査を行い、美濃にも古い窯があったことを知るため、美濃が1400年続く歴史ある窯場ながら「六古窯」に含まれなかった理由は、小山がその名称を定めた時期にあるといえます。

それに加えて、小山は「桃山時代のやきもの、特に美濃のものほど器形・文様に変化のあるものはなく、明るく、自由で、生気にあふれている」と述べ、志野や織部を高く評価

し、美濃は「桃山時代の製陶の中心地である」と考えていました。美濃焼へのこのような評価が「六古窯」の選定に影響したとも考えられます。

後に、小山は『日本六古窯の思い出』(1974年発行)において、戦後は美濃など全国各地で古い窯跡が発見され、「今日では正しい名称とはいえない」と述べています。

言葉の魔術師・小山富士夫が生み出した「六古窯」の呼称は、今でも強い印象を与える言葉であるがゆえに、美濃を含めて「七古窯」にならなかったことは残念に感じられます。ですが、これからはよその方に美濃焼を紹介するときは、「美濃焼は六古窯より長い歴史があります。しかも、その言葉を生み出した小山富士夫が晩年を過ごしたのは美濃焼の産地土岐市です」と胸を張って紹介するのはいかがでしょうか。

特別展のご案内

小山富士夫と美濃
Fujiyo Koyama and MINO - With the history of craft design in the Showa period -
—昭和の窯業界のあゆみとともに—

【期間】2021.10.1 → 2021.12.5
【延長】2021.12.9 → 2021.2.13
土岐市美濃陶磁歴史館
THE CITY MUSEUM OF MINO-KERAMICS

美濃陶磁歴史館
(☎ 051245)